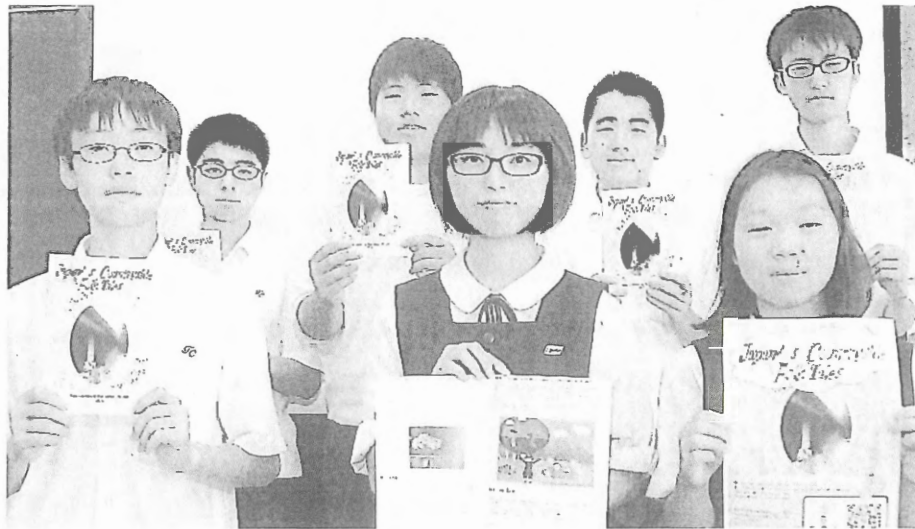


みなかみの民話 英訳

利根商パソコン部員が外国人観光客向けに

みなかみ町に伝わる民話を外国人観光客向けに英訳したミニ絵本とその電子書籍版を、学校組合立利根商業高校(同町月夜野)のパソコン部員がつくった。町と相談し、町内のホテルなどに置いて、みなかみが歴史と文化豊かな土地であることをアピールしたい考え。部長の閑野有紀さん(3年)は「町が取り組むインバウンド観光を応援したい」と話した。



完成した冊子を手にする利根商パソコン部員ら。みなかみ町月夜野

絵本はA5判カラー刷りの20ページ。同町の猿ヶ京温泉で民話を語り継ぐ持谷靖子さんの本の中から、「謙信の逆さ桜」「きつねの仕返し」「若返りの水」など10話を収録した。印刷代がかかるため、1ページで済む短い話を選んだという。原則1人1話で、選んだ生徒自身が挿絵も描いた。

発端は今年3月。新年度の目標を相談する中で、5年後の東京五輪を前にますます増えそうな外国人観光客向けに何かを発信しようと、民話に着目した。さっそく持谷さんと会い、「外国人は結末のはっきりした話を好む」という助言に従って10話を選んだ。

だが、英訳は想像以上の難作業だった。最初はインターネットで単語を調べたが十分ではなく、辞書を片手に悪戦苦闘した。民話に多い擬音や方言をどう訳すか。行間で意味を伝える日本語のあいまいな表現を、どう英語にするか。

表現・資金集め…苦難乗り越え

英語の先生に添削してもらった原稿は、直して真っ赤になって返ってきた。

英訳が完成したのは約3週間後。次は一昨年に道の駅の紹介アプリ作成のプロジェクトで協力してもらった専門家に相談し、電子書籍のイロハから勉強してスマートフォン、タブレット端末向けのコンテンツも初めて作った。こちらは1話ずつ表紙付きで、画面の文字ずれなどを修正して完成させた。

部員8人のパソコン部の年間予算は約10万円。毎年出す地域紹介冊子を賄うのが精いっぱいだ。そこでインターネットを通じて不特定多数から資金を集めるサービスを利用した。1万5千部の出版で目標額30万円に対し、41人が計51万8千円で応じてくれたおかげで、絵本は当初予定の16冊が20冊に拡大できた。

制作途中、町内のラフティング業者に頼んでお客の外国人にアンケートをとらせてもらった。外国人に声をかけるのは初めてだったが、身ぶり手ぶりの会話で得た回答は「民話には興味がある」。これはいけると確信をもった。閑野さんは「多くの人の協力でできた。一人でも多く見てもらえるようPRしたい」と話している。

(井上実子)